

2072年2月29日、全世界のドローンがハイジャックされ市民が無差別に襲われるという凶悪な事件が起こった。

テーリはその事件がきっかけでNSAへの入局を決意し、大学院生として研究する傍らインターンとしてNSAに協力。事件の解決に多大な貢献をし、NSA長官に高い評価を受け、その類まれなる活躍を表彰されるに至った。

事件解決とともにインターン期間が終了。とんとん拍子で雇用契約まで進んで、彼女は2072年9月にNSAに就職する予定だった。

そうして2072年9月、彼女は正規のNSA局員となつた。

NSA本部で、彼女はこれから一緒に働くことになる同僚のみんなに挨拶した。

「ぼつ、ぼくはミナガワ・テーリ。16歳です。あの、その、どう自己紹介すればいいかわかりませんが、とにかく、これからよろしくお願ひします！」

するとNSA本部は笑いに包まれた。

これから彼女の上司となるジョージ・マウンテン大尉が説明した。

「彼女は半年ほどまえ当局で、インターンとして例の全世界同時多発ハイジャック事件の解決の大きな助けとなってくれた。ここにいる者で覚えてる者も多いだろう。これからは正式に同僚として働くことになる。みんな、負けるんじゃないぞ」

ひとりがこう質問した。

「16歳って、高校はどうしたんですか？」

テーリは答えた。

「今年スタンフォード大学を修了しました。博士号もあります」

するとその場がどよめいたが、知っている者も大勢いたのでそれ以上話題になることはなかった。

そのときいきなりオフィスにリスが現れて鳴きながらそらじゅう走り回った。  
オフィスの女性局員が悲鳴をあげ、みんな慌てて退治しようとしたが、リスがテーリの肩にのぼって可愛らしくどんぐりをかじったので、大尉が落ち着いてたずねた。

「ペットかなにかか？」

「はい。彼女はぼくのペットのリスのミア。ぼくと阿吽の呼吸で動くことができて背中に盗聴器等を載せています。かわいいですしきっと仕事でも役に立ちますよ！ オフィスに連れてきちゃだめですか？」

前代未聞のことなのでみんな判断できなかつた。大尉は仕方なさそうに答えた。

「ペットを連れてきた奴がこれまでいなかつたから禁止もなにもなかつた。許可しよう」

N S A 本部はメリーランド州にある。テーリはすでに同州のコロンビアへの引っ越しを

済ませていた。彼女は西海岸の生まれだが、東海岸で過ごすのは初めてではなかつたので勝手はわかつっていた。

自己紹介を済ませ、彼女はオフィスの自席に座つてマウンテン大尉が後ろに立ち、かれの説明を受けていた。

「さてテーリ、さつそくだが最初の仕事だ。手段は問わない。現地に赴任してもいいし、本部のSIGINTシステムを利用してもいい。とにかくこの男をスペイして情報をを集め報告しろ」

かれが机に置いて示したプロファイル。名前はベン・エリクソン。容姿は警察の制服に七三分けの髪型、年齢は35歳身長6フィートの大柄の男性。ニューヨーク市警察勤務。階級は警部補。よくも悪くも目立つ過去はなく経歴も容姿もごく普通の警察官に見えた。

「だれですか？」

「最近ニューヨークを騒がせている連続殺人事件の容疑者のひとりだ」

「あ、聞いたことがあります、それ。ホワイトアース・ジャーナルで見ました。証拠不十分で無罪放免になつた汚職事件の容疑者ばかり狙つて……でも、警察が容疑者つて」

「その事件だ。もう6人殺され、A.I.が弾き出した100人余りの容疑者がいる。しかしどうどの人物も確証には至っていない。おまえの仕事はそれらの容疑者のうち、この男がそ

の犯人であるか、またはそうではないという判断材料になる証拠を集めることだ。A-Iの自動収集で見つからない証拠を見つける」

「そういうのって警察とかFBIの仕事じゃないんですか？ 警察が容疑者だから？」

「警察は証拠がないと容疑者の私生活までには干渉できない。だが、それでは捜査可能な範囲がかぎられてしまう。そこで容疑者の私生活を監視して証拠を見つけ、それを警察に流すのがおれたちの仕事だ」

しかしそのとき、彼女は確信までとはいかないものの、すこし違和感を感じていた。

「重犯罪を対策するためには、そういうたったスペイ活動が必要なことはわかります。でもこのひと、合衆国市民なんですよね……。NSAが合衆国市民をスペイすることって違法なんじゃないでしょうか……」

すると大尉は令状を見せた。

「令状だ。この男の身辺調査を命じている。これは裁判所命令だ」

「裁判所、つて……」

彼女はそれをひと目見て不安を覚えた。

(この裁判所、実在するの？ 噂ではNSAには秘密裁判所という後ろ盾があつて……)

大尉は続けた。

「監視の対象は国内外を問わない。いざれにせよ見つけた証拠は最終的には、現地警察が必然に発見するように情報操作し、実際に容疑者を逮捕するのは現地警察に任せる。また最初に説明したように交通費宿泊代その他必要な費用はすべて経費計上する。当局が発行したクレジットカードで決済し申請しろ」

テーリは早くもこの仕事に若干の違和感を覚えつつも、答えた。

「……わかりました」

彼女はそれからしばらく本部のSIGINTでかれの身辺調査をしていた。しかし彼女は過去の調査記録も精読しすぐにこう結論した。  
(これじやあらちがあかない。遠隔で探れる証拠はA-Iがことごとく発見済みだ。確証的な証拠を見つけるには実地調査するしか……)

だから彼女はNSAに入局した週の水曜日にはもう飛行機のチケットを申請していた。彼女の経費申請を見て大尉がたずねた。

「ニューヨークに赴任するつもりか？ 経費の申請理由を説明できるか？」

「A-Iの精度は抜群です。本部でこれ以上捜査してもなにか見つかるとは思えません。A-Iにできないことで人間にできることがあるとすれば、フィールドワークだけです」

「論理的な説明だ。申請は通るだろう。ニューヨークに2週間。存分に満喫してこい」

同じ週の金曜日、ニューヨークのホテルで彼女はシャワーを浴びていた。彼女の長くてウェーブのかかった栗毛が彼女の透き通った肌に張り付いていた。

宿はニューヨークでも最高級の5つ星ホテルだ。NSAは額面の給料こそ少ないものの経費は使い放題で実績に応じて高額の手当がつき賞与も多く年収は彼女の思っていたよりずいぶん高かった。

彼女は髪をタオルでまとめ、湯船に浸かって浴槽の縁にもたれかかって悩んでいた。

（お給料に不満はない。でもそうじゃなくて、この仕事を選んでほんとによかったのか、よくわからなくなってきた。国防のためとはいえ他人の私生活を覗く……それがほんとに正しいことなのか……ぼくにはわからない）

それから彼女は今回任された任務のエリクソンの身辺調査とその捜査の目的、政府要人の連続殺人事件について考えていた。

（警察の調べでは一連の事件の手口は被害者が監視カメラや警備ロボット等の少ない地域にひとりでいるときを狙って刃物で刺殺するというもの。刺された位置から犯人の身長は低いと見られる。エリクソンの身長は高いけどそんなもの姿勢次第でどうにでもなる。ご丁寧に高架橋の下での犯行で衛星にも映っていない。銃を使わない理由は登録情報から足がつくから。なるほどこのご時世アナログな手法のほうがかえって捜査が難しいことがよ

くわかつてゐる。警察はさじを投げ、被害者が要人ばかりであることから、当局は国防上この事件の調査が必要と判断。犯行現場周辺1kmの映像をAIがしらみつぶしに探索し容疑者を100名余りに限定。このリストのなか、もしくはその周辺に犯人がいる可能性は推定1%。ぼくが調べているあのひとが犯人である可能性は0.01%。こんな可能性に賭けて無実のひとの私生活まで監視する。それが当局のやりかた……）

エリクソンは6つの事件のうち少なくとも4つの犯行現場付近の監視カメラで姿を確認されていて、1つの事件では第一発見者として登録されており、また1つの事件で被害者が死亡するまえに通報している。それらのことはニューヨーク市警察の監察にも調べられ調所でかれはこの連続殺人を捜査するために現場にいたと述べている。

彼女は事件の概要を聞いてひとつ推理をしていた。

（でもそんな都合の良い場所に被害者がひとりでいることなんてそうそうあるだろうか。それよりは呼び出されて行つたと考えるほうが自然だ。はどうやって呼び出したのか。被害者のメールや通信記録は調べたけどなにもなかつた。記録に残らない場所で脅迫したのか……）

彼女はお風呂からあがりバスローブを着て鏡台でドライヤーをかけていた。そんなとき彼女の電話が鳴つた。それはターゲットのベン・エリクソンのマンションにだれかが帰宅

したことを知らせるものだつた。

彼女は慌ててホテルの北側の窓に向かつた。100万ドルの価値があるニューヨークの夜景がそこに広がつていた。

エリクソンの住んでいる分譲マンションはそのホテルから望遠鏡で見える位置にあり、彼女がそのホテルを選んだのはそのためだ。部屋のなままでカーテンで見えない。だがマンションの南側に位置する出入口は監視できた。

帰宅したのはエリクソンだつた。

(ほかのだれかがロックを解除してくれたらその隙を突くつもりだつたけど、エリクソン本人が帰宅してしまつた……これじやあ時間がない)

エリクソンが帰宅したとき、付近で待機していたリストのミアにテーリは指令を送つた。阿吽の呼吸で動けるというのは比喩表現で、ミアの背中の器具が微弱な電気信号を彼女の脊髄に流すことでテーリが彼女の動きを制御できる。バイオジャックだ。もちろんテーリにとってミアは友達でもあるので、そういつた行為は必要最低限に済ませる。

エリクソンがマンションの1階のロックを解除すると、扉が閉まるまえにミアが屋内に侵入。屋外の通気口等はねずみ対策がしっかりされていて侵入に使えそうになかったが、屋内の換気口は簡単な操作で開閉できるタイプのもので、ミアの侵入に使えそうな大きさ

があつた。

かれはミアの影に一瞬気付き舌打ちした。

「リスク……管理人に言つておかねば」

しかしかれはよもやミアが諜報活動しているとは思わなかつた。

かれはそのままエレベーターに乗つた。

ミアは換気口のボタンを押して開き、そこから内部に侵入。そこには先客のねずみたちがいた。ねずみたちの言葉はテーリにはわからないが、明らかにミアを威嚇していた。

（ミアに戦闘能力はない……ねずみに噛まれたらやられちゃう！）

テーリは彼女に電気信号を送つて別の侵入口を探させた。

だがマンションはかなり厳重なつくりになつておひ、人間と同じ経路でしか上階に行く方法はない。壁もかなりつるつるのぼるのは非現実的に思えた。

エレベーターとは別に屋内には階段があり、人間と鉢合わせする可能性があるため危険だつたが、テーリはマンションを階段で昇降する人間は少ないと判断。換気口に住み着くねずみのほうがミアにとつては危険だ。

「エリクソンは23階に住んでるけど、ミア、ごめんね」

ミアに言葉が通じるわけではないが、なぜだか彼女はそう言つてしまつた。

マンションの管理人室で階段をのぼるリスが監視カメラの映像に映っていた。だが恰幅のよい管理人はピザを2枚平らげ机に両足を投げ出し、椅子にうなだれて爆睡していた。

それはテーリにはわからなかつた。

（NSAが市民をスペイしていくことが明るみになれば問題になる。リスが監視カメラに映つていたってだれも気にしないだろうけど、いちおう）

彼女はマンションのセキュリティ・システムをハイジャック。映像をAIでフィルタしミアを消した。もちろん過去の記録からもだ。

セキュリティ・システムが有効な場所はエントランスや階段、エレベーターなどの共用施設だけで、各部屋まではハイジャックだけではわからなかつた。エリクソンは用心深くプライベートなシステムもカメラやマイクを塞ぎ簡単には室内の様子はわからない。

テーリはエレベーターをハイジャックし、適当に途中で停止させて時間を稼いだ。

エリクソンはだれもいない階でエレベーターが何度も停まつていらだつていた。しかしあれはそれでも監視されていることには気づかなかつた。

ついにミアが先に23階に到着した。

「ミア、窓の鍵を内側から開けて、外に出て。そこからターゲットの部屋のベランダまで行ける。ベランダには室外機が設置されている。きみならそこから入れる」

その通りに行動し、エリクソンの部屋に侵入。エアコンからぴょこりと顔を出した。テーリはミアが背負ったカメラから送られてくる映像で部屋のなかを見た。しかし不審なものは見つからなかつた。

（やっぱり、ごく普通の警察官としか……）

そしてエリクソンが帰つてくるまえにミアをそこから手頃な家具の隙間に移動させた。エリクソンはひとり暮らしだつた。かれは帰宅してすぐに明かりとエアコンをつけて、ネクタイをゆるめ、ラップトップの電源をいれた。

棚の下に潜んでいるミアからの映像でテーリはかれのラップトップの画面を見た。エリクソンはホワイトアース・ジャーナルのニュースを読んでいた。

（帰宅してすぐにニュースを読むなんて、生真面目なひとなんだなあ）  
彼女はすこし違和感を持つた。

（かれが見てるニュース、政治家の汚職事件だ……連續殺人犯が標的にする。偶然？）

テーリはかれが見てるホワイトアース・ジャーナルの記事を開いて読んだ。

それは政治家による児童虐待のスキヤンダルだつた。愛娘の非行を『しつけ』るために暴力を振るつたというのだ。

政治家の名前はエリオットと言つた。

エリオットはこれまで殺された6人と個人的な交友関係があり、当局の監視の及ばない場所で連絡をとる手段があつて当局がプロファイルした100人のうちのひとりだった。しかし当局の調査結果では、かれが6人を殺しても得なことはひとつもなく、またかれのアリバイは疑いようがないものでかれは明らかに白だった。

エリクソンが読んでいるのは、そんな政治家が娘に暴行を働いたというニュースだ。娘の名前は個人情報保護のため伏せられていた。

記事の文章は淡々としたものだつた。どの部位にどんな傷が何ヶ所だと全治何ヶ月だとかそういう数値が平然と書かれていた。だがテーリーは犠牲になつた現実の少女のこと想像して吐き気を感じた。娘が強く出れなかつたため、エリオットは不起訴になつた。

その後、ベン・エリクソンはニュースを読みながらつぶやいた。

「……私がやるしかない」

その言葉を聞いたとき、テーリーはかれが真犯人だと確信すると同時に、この連続殺人犯が本当に悪なのか、まったくわからなくなつてしまつた。

エリクソンが眠りに就いたあと彼女はミアを戻らせ、そして土曜日午前3時頃、報告書をまとめるために徹夜していた。それから彼女はひと眠りしたが、うまく寝つけず眠りは浅かつた。そしてほとんど寝た気もしないまま翌朝7時頃に起きて、習慣なので歯磨き等

済ませ、軽く化粧をして目の下のくまを消してから、録画・録音データとともに報告書を大尉に送信した。

「エリクソンが犯人なのはまちがいないと思います。聞いてください」

彼女はエリクソンのうわ言のような発言を再生した。

本部にいる大尉は答えた。

『たしかに疑いは濃くなつた。しかし逮捕できる証拠にはならない』

『ニュースの政治家、エリオットさん。かれが危険です。保護しましょう』

『ほかのだれかが狙われる可能性もある。もしエリクソンが犯人ならかれを監視すれば事足りる。おまえが2週間かれを観察しろ。なにか動きがあればすぐに報せろ』

「わかりました」

そのときテーリは思わずあくびをかいてしまつた。

『徹夜したのか?』

「ふえっ!? い、いえ……その……」

ビデオ・チャットだったので彼女の眼そうな表情が大尉にはよく見えた。

『国防も大事だがおまえの健康も大事だ。眠いならかまわず寝ろ』

「でも、こんなひどい事件が起きているのにそう安心して眠れませんよ」

『そんなひどい事件は年がら年中起きてるぞ。おまえ、一生睡眠をとらないつもりか?』

「いえ、そんなことはありませんが……」

『身体的にも精神的にもタフじゃないとやっていけないぞ、この仕事はな。ほかになにか気になることはないか?』

「その……」

彼女はすこし出かかった言葉をのどのあたりで反芻し、ついに口をつぐんでしまった。

『あるなら早く言え』

彼女は決心して言った。

「この事件の犯人は、その、ほんとうに悪人なんでしょうか」

『なに?』

「もう6人の被害者が殺されています。それは悪いことです。でも、被害者もみんな、罰されて然るべき悪いことを働いていました」

『……そういうことは考えるな』

「どうしてですか?」

『おまえは正義感が強い。それはよいことだし頼りになって、心強い。そういった信念がなくてなんとなく働いている奴よりはずつとな。だが同時に扱いにくくもある。我が強いと

いうべきか。おまえの正義感で善悪を判断しようとすると。それは全員が不幸になる』  
「……善悪だなんて。ぼくはただ、その、虐待されている子の助けになつてあげたくて」  
『話が見えないな。ニュースでやつていた娘を助けたいということか?』

「ベン・エリクソンは司法が彼女を助けられないから助けようとしている。ぼくにはそう思  
えました。自力救済。正しいことではありません。でも……悪いこととも思えなくて」

『悪いことだ』

「どうしてそう断言できるんですか」

『人間は判断を誤るからだ。100%正しい判断ができる人間が存在しない以上、人間が人  
間を裁くことはできない。それゆえ厳格な刑事手続きや司法手続きが存在する。わずかで  
もその判断を正確なものにするために。この事件の犯人はその手続きを無視し、自己の正  
義感に基づいて先走った行動をとってしまった。それは、悪いことだ』

「……」

『まあ、おまえが眼いことはわかる』

テーリはそれで我に返つた。

「……そうですね。ちょっと寝ようと思います」

12時頃になつて彼女は起き、しばらくぼんやりしていたが、昨晩から考えていたこと

をついに決心し、行動に移すことにした。

(大尉には『自己の正義感で考えるな』って言われたけど、これくらいなら……)

彼女が決心したのはベン・エリクソンに狙われている政治家、エリオットに、何者かに狙われているという危機が迫っている事実を知らせることだった。

ホワイトアース・ジャーナルのニュースで公表されていた情報をもとにちょっと調べただけでエリオットの自宅は簡単に割れた。

彼女はエリオットの官邸をおとずれ、エリオット夫人に偽造の警察手帳を見せた。

「ニューヨーク市警察のハセガワ・マリです。すこし旦那さんにお話があつてきました」

夫人は狼狽え、それでも冷静にテーリを迎え入れた。

エリオット宅でテーリは豪華なソファにちよこんと座り、エリオットと向かいあつた。エリオット夫人が簡単なお茶菓子とコーヒーを出した。

かれは明らかに動搖しつつたずねた。

「ハセガワさん、警察にはもう何度も事情は話したはずです。なぜいまになつてまた

「いえ、今度はすこし事情が違います。あなたのいのちの危機を知らせにきました」「例の連続殺人犯ですか?」

「ええ」

するとかれはやや敵意を見せ、威嚇的になり、警戒するような重い声色で答えた。

「よりもよつて私が狙われるとは思えない」

テーリはその警戒心が殺人犯に向けられたものなのだと思った。

「みんなそう思つていたことでしょう。そう思つて殺されました」

「具体的にだれが犯人かは目星はついているのでしょうか」

「いえ、その……」

テーリは話すべきかどうか迷つた。

(捜査情報は極秘。いくらかれに危険が迫つているとはいへ、話したら……)

「差し支えなければ教えていただきたい」

彼女はまだ迷つっていた。が、こう答えた。

「まだ話せません。ただ、その……」

「なんでしょう」

「いえ、その……ただ、警察官には気を付けてください」

「それは犯人は警察関係者、という意味ですか?」

彼女はずばり言い当てられてしまつておどおど手を振つて精一杯否定した。

「いえ、そういうわけじゃ……」

彼女は内心泣きそうだった。

(うわーん、これじゃあスパイ失格だよ！ いくら新米だからって……)

するとどういうわけか、かれはむしろほつと胸をなでおろしたような様子だった。口調が明らかに優しいものに変わっていたのだ。

「ははは、そこまでわかっているなら、犯人はいずれ捕まるでしょう。私は安心ですよ。婦警さんもどうか安心なさってください。私が捜査情報を話すことなどありません」

そのとき2階から降りてきた娘が部屋に現れ、おつかなびっくりたずねた。

娘は眼帯やギプスをしていて、テーリはその痛々しさに思わず目を逸らしてしまった。

娘は12歳くらい、身長は150cmくらいに見えた。

「パパ、そのひと、だれ？」

「サラ、部屋に戻っていなさい」

娘はサラ・エリオットという名前らしかった。

「警察のひと？」

「いいから」

「なんの話をしているの？」

「戻りなさい！」

政治家が大声をだすと娘は驚いておののき逃げるように戻った。テーリはそのときなにか引っかかった。

(刺された位置から犯人の身長は低い……)

（彼女はまだ引っかかることがあった。  
（犯人が警察関係者だとわかつて安心したように見えた。犯人がいざれ捕まると思うから  
じゃない……？）

彼女の頭のなかで目まぐるしく情報が整理され推理が進んでいた。

彼女はその考えをぶんぶん頭から追い払った。

(そんなばかな。ありえない。でも……)

彼女は政治家にたずねた。

「あの、つかぬことをお聞きしますが娘さんの非行つて具体的には……？」

するとかれは顔をしかめ、明らかに威嚇的になつて怒鳴つた。

「よその家庭の事情には口を挟まないでいただきたい」

「彼女がなにか悪いことをしたからあんなになるまで叱つた。そう聞いています」

「話す必要はない。もう帰つてくれ！」

彼女は官邸を追い出されてしまった。

しかし彼女はこれまでの事実を整理するとベン・エリクソンは白の可能性が高いという結論に達しつつあつた。

彼女は意を決してサラ・エリオットをスパイすることに決めた。もともと父親がNSAにスパイさせていたので、娘の諜報令状も簡単にでた。NSAの背後にある裁判所は国防のため警察には令状をださないようなわざかな嫌疑でも令状をだす。

リスのミアが2階のサラの部屋の窓から彼女の部屋に侵入。一瞬のことだつたのでサラは気付かなかつた。

彼女は自室のベッドに横になつてパソコンを開きニュースを見ていた。  
そのときエリオットが彼女の部屋に入つていきなり怒鳴りつけた。

「サラ、そこに座りなさい！」

サラは驚いて委縮してしまつた。しかし言う通りにした。

「パパ、ごめんなさい。私、あいつらが許せなかつたの。弱いものいじめばっかりして」「もう取り返しはつかない。あのときは私も冷静さを欠いていた。しかし私にもおまえをかばうことはできる」

「……私、証拠は残さなかつたつもりよ」

「そうだ。偉いぞ。疑いの目は私に向いてる。6人を殺したのは私だ。そういうことにし

て、おまえはもうなにも喋るな。なにもするな。じきにすべてが収まる」  
「……」

テーリはそれを見て、聞いて、なにもわからなくなってしまった。だれが悪くて、だれがいい人間なのか。

彼女はきっとだれも悪くないしだれもよくないのだろう。そう思った。  
すくなくとも彼女がだれが悪くてだれがいいなんて判断することはできない。  
彼女にできることは、仕事だけだ。

だから彼女はその証拠を当局に報告した。

当局はその録音を自白と判断。出処がわからず、かつ証拠能力が失われない自然な経路ですみやかにそれはニューヨーク市警察に送られた。

ニューヨーク市警察も同様にそれを自白と判断し、それだけで起訴はできないが、捜査令状を発行するにじゅうぶんな証拠と判断した。

ベン・エリクソンは自己の正義感に基づき、独自にこの事件を捜査していた。令状なしの捜査は違法だ。たとえ証拠を見つけても裁判では証拠能力は認められない。

ニューヨーク市警察はエリオットを疑っていた。しかし娘のサラに目をつけていたのはエリクソンだけだった。かれは刑事の勘でサラの部屋を捜索すれば必ず証拠が見つかると

踏んでいた。

しかしエリクソンは捜査令状がなかつたため、サラの部屋を捜索できなかつた。そんなかのものとに突然、自白にも思える録音データが届いた。それはサラの捜査令状を発行するに足る証拠と判断された。

それがNSAの暗躍によつて得られた情報だとは、だれも思わなかつた。

令状を持ち、エリクソンはエリオット宅を訪問した。

「こんなにちは、エリオットさん。私はニューヨーク市警察警部補のベン・エリクソン。娘さんのお部屋の捜査令状です」

エリオットは顔面蒼白になり、サラも恐怖で震えていた。

捜索の結果サラのベッドに血痕が見つかり、それは被害者のものだとわかつた。分析の結果それは被害者が刺されたとき飛沫した血液が彼女の皮膚に付着し、洗わずにベッドと接触したことで残つたものだとわかつた。サラは凶器や犯行時着ていた衣服はすべて処分しており証拠はそれ以上ほとんどでなかつたが、唯一それが証拠となり彼女は捕まつた。

サラ・エリオットは未成年だつたため権利保護のため報道では名前を伏せられていた。未成年の裁判は大人のそれとは違う。重犯罪の場合には大人と同様裁かれる場合もあるが、彼女はおそらく、少年院へ送られることになるだろう。

テーリはいろいろな偶然が重なったとはいっても、結局サラの罪を暴くことができた。しかし彼女はそれを結果オーライと素直に喜べなかつた。

その後彼女はNSA本部に戻り、大尉に悩みを打ち明けた。

「ぼくは捜査状況を一部エリオットさんに話してしまいました」

「そうだな」

「今回はたまたま良い結果に終わりました。でも……」

「でも？」

「ぼくはあのままだつたら、エリクソンを犯人だと決めつけていたかもしれません」

「それも事実だ」

「大尉、あのとき言いましたよね。『自己』の正義感で考えるな』って……」

「ああ、言つたな」

「ぼくは結局、ぜんぶまちがつてました。大尉の言つたことが正しかつたんです。ぼくは正しく判断できませんでした」

「だが最終的には正しい答えにたどりついた」

「偶然ですよ」

「運も実力のうちだ。自己の正義感で行動するのは時期尚早だった。しかし済んだことでく

よくよするのは尚悪い。いまはただ、結果的に正解を選んだことを喜ぶことや」